



認知症と共生

梅雨の晴れ間に、そろそろ夏の強い日差しを感じておりますが、皆様にはいかがお過ごしでしょうか？

最近は入道雲や、わた雲が見られており、夏を身近に感じています。これからの時期は台風や線状降水帯等の発生により、豪雨災害が発生しやすくなります。地震も各地で頻発しており、能登半島地震による被災者の多くはいまだに避難所で暮らしておられる現実があります。少しでも早い復興と皆様の安全と健康が守られますようお祈りいたします。

このシャローム横浜では、“ひまわり”という地域密着型認知症通所介護サービスがあります。ここには1日最大12名のご利用者が通われており、一人ひとり違った生活上の課題を抱えておられます。多くの事例を見てきた職員が“この方は大変だろう”と感じる方もありますが、ケアマネを中心に様々な在宅サービスを利用しながら頑張つて生活しておられる姿を見て、頭が下がる思いであります。住み慣れた場所

でできるだけ長く生活しながら“ひまわり”での活動を楽しんでいたのだと共に、今後の安心としてシャローム横浜にある様々なサービスを選んでいただけるように努めてまいります。

5月26日の朝刊に“2060年、前段階を含め65歳以上の3人に1人”どう考える”という記事が目が留まりました。そこには2060年には認知機能関連症状のある方が65歳以上の3人に1人の割合になることが予想されるとありました。その状況を踏まえ、国は「認知症と共生」を目指していますが、地域住民の理解や財源・介護人材の不足など、様々な課題があることが記事の中に記されていました。

今後も様々な問題に直面すると思われませんが、当法人の基本理念にある通り、認知症をもたれる「いのち」に対して誠実に向き合い、敬い・愛し・仕えることで、地域の皆様と共に歩んでまいりたいと願っております。

施設長 高原 信夫

ご利用者の手による生け花のアート

生け花の好きなご利用者の作品です。職員と一緒にシャロームに咲いているお花を摘み、美しく生けてくださいました。作品を見た他のご利用者や職員と会話も弾み、次の作品の制作にも意欲を見せてくださっています。生け花の周りの飾りにもこだわっており、私たち職員もとても楽しみにしています。

4階課長 松岡 勇次



第 287 号

令和6年6月 15 日発行
(毎月1回 15 日発行)

責任者:施設長 高原 信夫
〒241-0802
横浜市旭区上川井町 1988
社会福祉法人
アドベンチスト福祉会
シャローム横浜
☎045-922-7333

編集委員
荒金・石川・石橋

<https://www.adventist-welfare.jp/yokohama/>



生活相談員グループの紹介

入所されている方・ショートステイご利用の方とご家族が笑顔で穏やかに過ごしていただけますよう「あったかいがいいね」をモットーに励んでいます。これからも宜しくお願い致します。



有馬 荒金 山本 原田 田中 加藤

相談員グループに質問

- ① 大切なもの
- ② 趣味
- ③ シャローム歴

田中職員

- ① 家族
- ② 登山
- ③ 26年

有馬職員

- ① 家族
- ② 美味しい物を食べる
こと・水泳
- ③ 23年

加藤職員

- ① 3人の子供達
- ② 雑誌集め
- ③ 11年

原田相談員

- ① 愛犬(17才)
- ② ホットヨガ・映画鑑賞
- ③ 25年

山本相談員

- ① 愛息子(3才)
- ② 旅行・ドラえもののグッズ集め
- ③ 22年

荒金相談員

- ① 愛娘(3才)
- ② 音楽鑑賞・ゆずのコンサート
- ③ 10年

お食事に彩りを添える美味しいお弁当のご提案



お出かけの際には、色とりどりの美味しいお弁当はいかがでしょう。

ちらし寿司・鮭の木の芽焼き・鶏つくね・エビチリ・キャロットラペ等々・・・豊富なメニューを取り揃えております。お弁当を通して、日常に彩りを添えてみませんか。

食事サービスでは、ご用命があれば会食のお弁当もご用意しております。3か月前からのご予約を承っておりますので、お気軽にご相談ください。

食事サービス 遠藤 洋子

もし、そこに愛がなければ・・・

第195回 チャプレン 上前 至

2015年の夏、私は岡山でノートルダム清心女子大理事長の渡部和子氏の生の声に接したことを忘れない。彼女は2016年12月、89歳で没したのでその1年前の事である。彼女はマザーテレサ来日時の通訳者でもあったが何と言っても、あの戦前、軍によるクーデターニ・二六事件で暗殺された教育総監・渡辺錠太郎大將を父に持つ娘であったことである。しかも彼女は事件当日、父親暗殺時の一部始終を現場で全て知る経験をした。8歳の時である。そうした悲惨な経験をしていたが故に成人になって修道女となった理由も理解できるのである。その後、彼女は米国修道女会に派遣され学びを終えて帰国後、36歳で女子大学長となった。その後、彼女はその生き様を通して多くの後輩女子を育てていった。

1986年7月、あのクーデターに関わった青年将校15名が処刑された日の50年後、東京で彼らの

法要が遺族によって行われた。その時彼女にも出席要請の招待状が出され、それを受けるべきか否か悩んだが最終的に父親もそれを許すだろうと思い出席した。焼香を終え合掌してふりかえった時、2人の男性が自分に向かって深々と頭を下げ「私達こそ先にお父様のお墓に参るべきでしたのに」と言った。その時彼女は初めて、反乱軍という汚名を着せられて生きてこられた身内の人達こそ、きっと私以上に辛い人生を生きてこられた事に気づかされたのである。その時に彼女のニ・二六事件も終わり、一つの区切りがついたという事である。「愛によって始めて見えてくる世界があります」と。参照 コリントの信徒への手紙Ⅰ 13章 1～3節

